

# 雪子さんの 「当世風適応障害」



illustration : sakuma kana

昔 は「男やもめにウジッ  
がわく」と申しました。

多分昔の日本の殿方は男女の世界を全く住み分けておられましたので、急に妻に先立たれたり、または妻に子供を連れて出て行かれてしまわれたりしますと、急にかの中間がガラッ!!と広くなり、何をやらばよいか、何から手を付ければよいか解らなくなってしまうのだと思います。それ

でウジッがわくのでございませう。

しかし近代は男女同権で、小中学校の頃から男女に関係なく家庭科があり、ボタンの付け方、ご飯の炊き方などを教えてもらうのです。そのため、全く家事ができない家庭には不向きな女性や「きゅうりもみ」や「サラダ」をとてもし上手に美味しく作る事ができる男性が生まれることにな

ったのでございます。

雪子さんはその名のごとく色白で可愛らしい感じのする女性でして、資格として介護福祉士を持っており、大きな老人施設に勤務しております。

老人のお客様からの評判も良く、「雪子さん」「雪子さん」と愛されていたようでした。ある地方の団体さんが雪子さんの勤務している老人ホーム

を見学に来られました際に、雪子さんを見て、その可愛らしさに心を奪われ、「僕と結婚してほしい!!」と申込まれたのでございます。

その方は山形市に施設をお持ちの方でした。東京生まれ東京育ちの雪子さんには「山形市」と云われましても小学校の地理の教科書に出て来た地方都市であることは解りますが、他のことは全く解りま

せん。

山形の県民性は、大変質素で堅実な方が多いので有名です。まだ高速道路が全部できあがっていませんでした頃の話ですが、私は、秋田に行くのに下の国道を走っておりまして、途中でトイレを借りたくなり、県庁であれば大丈夫であるうと山形県庁の庁舎に入りトイレを拝借して手を洗おうとしました。県庁のトイレですのに、昔風の水の入った大きな入れ物が軒下に下げられてあり、入れ物の下にある棒をチョンチョンと押すと水が出て来る本当の昔風の手洗器でした。大変ケチで有名な我が家でも、とつくの昔に破棄処分した品物でしたので感動しました。

雪子さんに結婚を申込みたのはそんな山形市に施設をお持ちの堅実な山形県人の社長さんでした。背丈も高く男

前の方でしたので雪子さんもOKをされたのでございます。結婚されましたらすぐ十月十日で可愛らしい女の赤ちゃんがご誕生になりました。今まではお腹の中に居りました

ので手もかかりませんでした。が、生まれますと夜中でも泣けば起きなければなりません。おむつも取り換えなければなりません。お乳の出が悪いと歯ぐきで乳首に噛み付きます。もうすっかり嫌になりすぐ人工栄養に切り替えられたので御夫君は、「子供の健康のためには母乳が一番良いのに」とブツブツ云われますので益々嫌になり、「子供なんか要らないワ!! 東京で働けば、朝定時に出勤すればお昼休みもちゃんとするし、休憩時間も明確で退勤後は本当の自由時間なのだから、こんな泣けば夜中でも起きなければならぬ折目切れ目のハッキリしない生活は労働基準法違反だワ!! 子供なんかイライナイ!!」と赤ちゃんを置いて離婚届に判を押して「東京に帰る!!」と出て行ってしまわれたのでございます。

御夫君も驚かれ、自分の対応に悪い処があったのではなにかと婦人科の先生に御相談になりました。先生は「これは現代に多くみられる適応障害」とい病気で、子供が生まれると精神的に対応できなくなる御婦人が多いので珍しいことではありません」と慰めてくださいました。

しかし、田舎のことで「東京から来た嫁さんが子供を置いて出て行った」と云う噂はその日のうちに町中の人達の知る処となり、とうとう御夫君も施設を知人に譲られて子供を連れて東京でサラリーマンをしながらでも子供を育てることにします、とのお話でした。

九十一歳の私はそのお話を伺って、私の方が世の中に適応障害を感じてしまったのでございます。

お江戸や明治の頃どころか、昭和の始めの頃ともスッカリ世の中の考え方が変わってしまったのだと想いました。

昔は自分のお腹を痛めた子供のためなら、世界中を敵に廻しても子供のために!!ガンパロー!!と考えたものでした。

母親が「子供なんかイライナイ!!」と云い、父親が自分の仕事を他人に渡しても自分の子供だから自分で育てるとは、まるで男女が逆のように想え

たのでございます。現代は男だから、または女だからと云う固定的な考え方はなく、自由な考えで適応を考えないと障害が起きる時代になったようでございます。

しかし、フト死亡適齢期とは何歳なのだろうか? と考えてしまいました。この仕事をして貰いたいと期待されている時代を過ぎ、長命でいることは、世の中に対して適応障害を起こすのではないかとフト考えたのでございます。

少子高齢化の時代、税収の不足する時代等々、適応困難な時代が眼の前に迫って来るようでございますのに、高齢者の寿命は延びております。高齢者の方が死亡適齢期等も考えてなるべく邪魔にならないようにと静かに過ごすことを考える必要が、現代にはあるようでございます。

岩城祐子

大正13年栃木県生まれ。昭和54年に都市型有料老人ホームの先駆けとなる施設を開設。平成13年に特別擁護老人ホームを、平成18年に高齢者長期滞在型ホテルを開設。独特の語り口調が特徴で、著書多数。